

The influence of psychological distance on the level of embarrassment in eating alone situation at the university cafeteria.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34284

学生食堂での個食における羞恥感に 心理的距離が及ぼす影響

池上貴美子・中嶋美希*

The influence of psychological distance on the level of embarrassment in eating alone situation at the university cafeteria.

Kimiko IKEGAMI and Miki NAKAJIMA

問 題

ランチメイト症候群

町沢(2002)によれば、近年、職場や学校などの食堂で、食事を共にする友人(ランチメイト)がいないこと(以下、個食と呼ぶ)に対する辛さや恐怖を訴える者が増えているという(ランチメイト症候群)。その孤独に耐えられずに、うつやノイローゼになる、あるいは学校や会社に行けなくなり、退学や退社に追い込まれる人が少なからずいるという。主に女子学生や若い女性社員に多い現象であるが、最近では、若い男性の間にもこの傾向が広まりつつあるという。

さらに近年では、一般の大学生にも「一人で食べているのを見られるくらいなら食事を抜くほうがマシ。」と考える学生が増えているという。町沢は、そのような心理を「人の目を気にし、ウチとソトを明確に分けたがる日本特有のもの」と指摘している。特に、現代の若者について、「仲間ではない他人にどう思われても気にならない。親しい友人も味方だと分かっているから一人でいるところを見られてもかまわない。問題は、顔ぐらいは見たことがある程度の人で、敵か味方が分からない人に“浮いた自分”を見られることを恐れているのではないか。」と指摘している。また佐藤・畑山(2002)も、香山(2002)の述べる、学校や職場でのランチが、単なる栄養摂取の場のみならず社交場としての意味を持ち、相手との親交を深める場として機能すると

の主張を重視している。

成因：孤独不安と、周囲の視線への社会的不安

①孤独不安 近年の若者は常にメールや電話で誰かとつながることに執心しているように見受けられる。この現象について、諸富(2001)は、「絶えず誰かと一緒にいて安心感を獲得し、『私たち、同じ』を確認しあう。それによって、孤独や自己の個別性の自覚から逃れようとするという、高校生的な感覚が、そのまま大学生や社会人になってもひきつがれ、心の成熟を妨げているようにみえる」と述べている。ここから、ランチメイト症候群には、現代の若者が、孤独を極度に恐れ、孤独に耐える力が欠如しているという孤独恐怖の要因が浮かび上がる。

②周囲の視線への社会的不安 一方、辻(2006,2009)は、学生食堂での個食について、「一人でいる寂しさに耐えられない、怖いということではない。まわりにピアグループ(同輩集団)のいない、例えば自宅や街中であれば一人で食事するのも平気だ、という。一人でいるのが怖いというより、むしろ友だちのいない/友だちのできない一人ぼっちと見られること、そのまなざしが怖いのだ。このような孤独に向けられる他者の視線への意識は、友人を持っているべき/持っていないと恥ずかしいとする、ある種の規範意識が彼らに存在していることを示している」と指摘する。

さらに、辻の「友人をもっているべき/もっ

ていないと恥かしい」規範に関して、大嶽(2005)は学校などの集団内におかれた状況において「ひとりであるような人は変わった人だ」と考え、他者から同様な認知をされることへの怖れから形成される「誰かと一緒にいなくてはならない。ひとりぼっちでいてはいけない」という、対人関係のあり方に関する思考様式を「ひとりぼっち回避規範」と指摘し、この「ひとりぼっち回避規範」が過剰に高いと、対人場面で不安が生じやすくなり、当該環境における適応感を揺るがす一因になると報告している。

また諸富(2001)も、「頭が悪いとか、成績が悪いとか、運動神経がまったくない・・・人間にとって欠点はたくさんある。しかしその中で、今の若者にとって、一番つらいのは『あいつ友達いないんじゃないか』と思われること。頭が悪いと思われるより、運動神経がないと思われるより、容姿が悪いと思われるより『友だちができないやつ』と思われることほど、みじめでつらいことはない。いまや『友だちがいるかないか』は若者にとって、人間診断の最もシビアな基準となっている」と述べている。

これらのことを踏まえると、ランチメイト症候群における恐怖とは、一人で食事をとるという行為を他者に見られることで、「一人であるような人」＝「友だちがない、ネクラである、集団に入れない」といったネガティブな認知を他者からなされてしまうのではないかと、といった周囲の視線に対する社会的不安が行為者自身に喚起され、脅かされることなのではないかと考えられる。

このように、学食での個食における羞恥感の成因には、内的な孤独不安と、外的な周囲の視線への社会的不安が想定されるが、本研究では現代の若者にとってより切実な後者の社会的不安の方に焦点を絞って研究を進めることとする。

ランチメイト症候群と自己呈示

日常の対人関係の中で、われわれは、他者が利用するはずの手がかりをうまく調整して特定の印象を他者に与えようと試みている。つまり、

様々な自己の側面のうち、特定の側面を選んで「見せ」、他の部分を見せない」ということを行っている。こうした行動の側面を自己呈示(self-presentation)という(安藤,1994)。

ランチメイト症候群において「一人で見られるを見られたくない」「友だちがいなくと思われることがイヤ」と感じることは、本人が一人であるという状態をネガティブにとらえており、それを他者に見せることを拒んでいるからだと考えられる。つまり、ネガティブな状態の自分を他者に「見せない」自己呈示であり、「一人であるのを見られたくない」という自己呈示欲求ではないかと考えられる。

羞恥感

菅原(1998)は羞恥について、「痛み」の役割と比較しながらその特徴を次のように述べる。痛みは自分の身体の危機を知らせる警告信号であり、人はこれにより自分の行動を安全な方向へとコントロールする。羞恥も痛みと同様に、避けるべき、あるいは緩和されるべき不快な状態を人に知らせ、何かの警告を発している。

自己呈示の機能と羞恥感

菅原(1997)によれば、Leary & Kowalski (1990)は自己呈示の機能として「自尊心の高揚」「利益の獲得と不利益の回避」「アイデンティティの維持」の3つをあげている。羞恥感が自己呈示の3つの機能のうちどの側面と関係するかについて、今日重視されているのは「利益の獲得と不利益の回避」である。つまり、他者から拒否されることによって失う様々な社会的利益の問題である。

他者から拒否されることは人間関係それ自体にひびが入ることになる。我々は日頃から他者や集団との人間関係に多くを依存して暮らしており、人間関係は個々人にさまざまな経済的、情緒的、身体的、心理的利益をもたらしてくれている。したがって、これらの関係を傷つけかねない醜態や失態は物質的にも心理的にも個人の存在基盤を揺るがすことになる。このとき抱く不安が羞恥であり、羞恥とは他者から拒否さ

れることへの警告信号であると考えられている(菅原,1997; Miller,1995)。

以上より、われわれは人と共にあるとき、他者の目に映る自分の姿を操作して良い印象を与えようと試み、様々な自己の側面のうち特定の側面を「選んで見せ」、他の部分を「見せない」ように自己呈示を行う(安藤,1994)。そこで、ランチメイトのいない場面で生起する恐怖をく友のいない一人である自分>を見られたくないという「見せない自己呈示」の失敗に対する情緒的な反応、すなわち心理的な個人の存在基盤を揺るがす、他者から拒否されることへの警告信号—羞恥感(菅原,1997)—と捉えることとする。

羞恥感と心理的距離

羞恥感の発生については、発生場面に依存する他者との心理的距離が大きく関わっていることが指摘されている。佐々木・菅原・丹野(2005)は、井上(1977)が人間関係を親しさの程度によって「ミウチ、ナカマウチ」「セケン」「タニン、ヨソノヒト」の3層に大別し、失態を目撃された場面で、羞恥を最も強く感じるのが中間的な親密性の「セケン」に対してであるとの指摘を重視している。笠原(1977)はこの関係を「半知り」と呼び、内沼(1977)は「中間的關係」とした。「半知り」や「中間的關係」という表現は、関係を分類する基準が明確にはされていないが、日常的には了解されやすい。角尾(2009)は『「半知り」や『中間的關係』という名称は、ともすれば特別な関係であるかのような印象を与えるが、実のところそうではない。我々にとって親しい間柄の人たちというのは、自分の持つさまざまな人間関係において相対的に少なく、普段かかわる人間関係の大半は『半知り』や『中間的關係』の人から構成されている。」と述べる。実際に学校や職場などの人は「半知り」や「中間的關係」にある人が多いと感じられる。したがって、学校や職場では一人で昼食をとるということは、必然的にそのような関係の他者から見られる状況が生じるため、より強い羞恥感を抱いてしまうことが想定される。

羞恥感と心理的距離の逆U字的関係

佐々木ら(2005)によれば、“親しさ”を“心理的距離”という言葉に置き換えた場合、羞恥感の程度と、観察者の心理的距離との間には逆U字的関係が成立するという。すなわち、観察者との心理的距離が近くなるほど羞恥感が高まるが、ある程度の心理的距離をピークにして羞恥感の程度は逆に低下していく傾向があると予測されている。山際・堀(1991)や堤(1992)は場面想定法を用いて心理的距離と行為者の羞恥感との関連を分析し、逆U字的関係を示した。

一般に逆U字的関係は2つの相反する影響をもつ要因が拮抗する場合に見られることが多いと考えられる(菅原,1998)。つまり、心理的距離が近いほど羞恥を高める1つの要因があり、同時に心理的距離が近いほど羞恥を低下させる他の別な要因が存在するということである。これら2つの要因がお互いの影響を相殺しあうことで、ちょうど中間的な段階に最も羞恥が高まるポイントが出来上がると考えられている。

二つの相反する要因—自己呈示モデルより—

佐々木・菅原・丹野(2005)は逆U字的関係を成立させる2つの相反する要因として、自己呈示モデルを用い、逆U字的関係の成因を明らかにした。すなわち自己呈示の動機づけを、人の集団への所属欲求(Baumeister & Leary,1995)に基づき、他者からの“拒否(を)回避(する)欲求”とし、心理的距離が近い他者ほど、依存関係が成立しているので、関係維持が重要であり、拒否されることは羞恥を高める要因になると考えた。一方、自己呈示に成功する主観的確率を、自己呈示の失敗により生じた“自己イメージ損傷度”とし、逆に心理的距離の近い他者ほど、失態を犯した人本来のイメージを熟知しているため、仮に失態を犯してもそのイメージが揺らぐことはなく、失態を犯した人の自己イメージ損傷度は低く抑えられると考えた。

佐々木ら(2005)は羞恥感の程度を“自己呈示の動機づけ(拒否回避欲求)”と“自己イメージ損傷度”という相反し拮抗する2要因が同時に

関わる2要因の積として予測した。すなわち羞恥感、心理的距離が近い・遠い場合は、2要因が相殺されて低くなり、中間的な心理的距離の他者に対して最も高い値を示すことになる。彼らはこのモデルにより羞恥感と心理的距離の間の逆U字的関係を自己呈示モデルにより説明できることを実証している。

以上から、ランチメイト症候群において「一人で昼食を食べられない(食べたくない)」という感情が、一人でいる自分を見られたくないという「見せない自己呈示」に基づく自己呈示欲求であるとするならば、ランチメイト症候群で感じる恐怖は自己呈示の失敗による羞恥感と捉えることができる。したがって、ランチメイト症候群にも、前記の観察者との心理的距離と恐怖(羞恥感)に逆U字的関係が見られ、その羞恥感自己呈示モデルにより説明できることが予測される。

そこで本研究では、ランチメイト症候群における恐怖を「羞恥」ととらえ、これまで臨床心理学的に報告されているランチメイト症候群の諸相を社会心理学的な側面から明らかにする。

また付加的な目的として、対人不安傾向との関連も検討する。対人不安傾向について、臨床心理学や精神医学において対人不安の発生要因として「半知り」の相手に接触するような状況で、より強い不安を感じる事が報告されている(笠原,1977)。こうした見解は、逆U字的関係が、対人不安傾向の高い者にとってより顕著である可能性を物語っている。そこで逆U字的関係の性質を明らかにするためにも、対人不安傾向の高さとの関連について分析を試みる。

以上より、本研究では一般大学生を対象に、学生食堂(以下、学食と呼ぶ)での個食場面における羞恥感に心理的距離が及ぼす影響を、先行研究にならない日常場面で失態を演じたときの羞恥感と対比させながら検討する。研究1では、日常場面で失態を扱った先行研究の方法にならない、個食場面で観察者が多数の中の一人の場合を想定し、研究2では個食場面で観察者

が多数(全員)の場合を扱うこととする。

研究1

目的

研究1では、従来の研究に見られる羞恥感と観察者の心理的距離との間の逆U字的関係が、一般大学生の学食での個食における羞恥感においても現れるかについて検討し、学食での羞恥感の特徴をより明確にする。この場面では観察者は大勢の中の一人とした。

方法

実験参加者 大学生249名(男性123名,女性126名;平均年齢20.48歳,SD=0.921)。

調査実施期間 2009年12月上旬

想定場面 佐々木・菅原・丹野(2005)に倣い場面想定法による質問紙を構成した。ランチメイト症候群に準ずる場面として、「学食において一人で昼食をとっているのをみられる」場面を設けた。また、日常場面で失態を演じたときの羞恥感の程度と比較するため、佐々木・菅原・丹野(2005)で用いられた対人場面である「粗品をもらうのに列に並んでいるのを見られる」場面を用いた。

各場面の教示文は以下の通りであった。

- ・ 学食場面「2限目の授業が終わり、あなたは学食にご飯を食べに行くことにしました。一緒に食べる人が見つからず、次の授業もあるため、一人で行きました。学食は混雑していましたが、ようやく席に着くことができ、一人で食べ始めました。その時、あなたはそこを誰かに見られていることに気づき目をそちらに向けると、それは“XXX”でした。」
- ・ 粗品場面「新しいお店がオープンし、オープンの記念に粗品としてトイレットペーパーを配っているらしく、お店の前には粗品を目当てに主婦や家族連れが並んでいます。あなたも粗品をもらうため、その列の後ろに並びました。順番を待っていると、あなたはそこを誰かに見られていることに気づき目をそちらに向けると、それは

“XXX”でした。」

心理的距離

山際・堀(1991)で等間隔に設定された10個の人間関係例を若干改変し、“心理的距離：近群” “心理的距離：中群” “心理的距離：遠群”の3つの観察者を設定した。それぞれ、“最も気心の知れた同性の友人” “話したことはないが、顔や名前を知っている同性の人” “見知らぬ人”の3つの観察者である(佐々木ら, 2005による)。

手続き

質問紙を講義において配布し、回収した。各実験参加者には“学食場面” “粗品場面”の2つの場面のうちいずれか一つがランダムに呈示された。その際、前述した場面記述のうち“XXX”と書かれた部分に、心理的距離の異なる3つの観察者が割り振られた。観察者の順序はランダム順であった。実験参加者は受け取った場面の記述を読み、具体的な1つの状況と3つの観察者を想像した上で以下の質問に回答した。

質問内容

(a)羞恥度

樋口(2000)の恥の下位情緒の因子分析結果に基づき、羞恥感を表す7つの項目 (“恥ずかしい” “体裁が悪い” “みじめだ” “おどおどしてしまう” “はにかんでしまう” “気恥ずかしい” “気おくれする”)について、そのときに自分が覚える気持ちとして当てはまる程度を6件法(全く当てはまらない～非常に当てはまる)で回答させ、合計得点を羞恥感の強さの指標とした。 α 係数は学食場面・粗品場面各0.961, 0.914であり、項目の信頼性は非常に高かった(α 係数 $>.08$)。

(b)対人不安傾向の測定

Leary(1983 生和監訳 1990)の Interaction Anxiety Scale(IAS)を用いて、6件法(全く当てはまらない～非常に当てはまる)で回答させた。 α 係数は学食場面・粗品場面各0.907, 0.941であった。また平均値(標準偏差)は学食場面、粗品場面の順に、103.46(16.63)、101.83(21.63)であった。

倫理的配慮

質問紙によるデータは統計的処理を施し、匿名性が守られることを説明し、同意した方に回答をいただいた。

結果

【羞恥感の分析】各心理的距離における羞恥感の平均得点をFigure 1に示した。各場面における羞恥感得点の平均値について場面(学食場面、粗品場面)×心理的距離(近、中、遠)の2要因分散分析を行った。その結果、場面および心理的距離の主効果(各 $F(1,247) = 3.820, p < .05$; $F(2,494) = 72.583, p < .0001$)と場面×心理的距離の交互作用($F(2,494) = 3.934, p < .05$)がみられた。交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、羞恥感得点平均値は学食場面でも粗品場面でも心理的距離の中群が最も高く($F(2,494) = 21.672, p < .0001$; $F(2,494) = 54.844, p < .001$)、中群と近群、中群と遠群、近群と遠群の間に有意差があった(いずれも $MSe=32.786, df=494$)。また羞恥感得点の平均値は心理的距離が近群と遠群において、学食場面が粗品場面よりも有意に高かった($F(1,741) = 3.249, .10 > p > .05$; $F(1,741) = 8.332, p > .004$)。

次に、性差を検討するため平均羞恥感得点について場面別に、性(男性、女性)×心理的距離(近、中、遠)の2要因分散分析を行った結果、学食場面において性の主効果($F(1,122) = 4.021, p < .05$)と性×心理的距離の交互作用($F(2,244) = 2.520, p < .10$)がみられた。

単純主効果の検定により、心理的距離：中群と

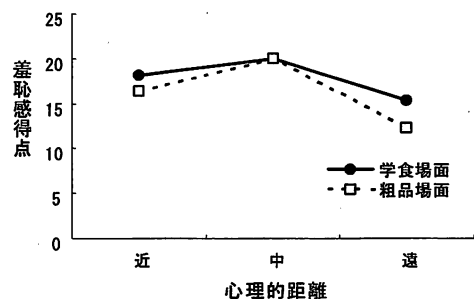


Fig.1 各心理的距離における羞恥感得点平均値

遠群において5%水準で性の違いの効果が有意で、女性の羞恥感得点が男性の羞恥感得点よりも高かった。また女性は心理的距離：中群が他群に対して高かったのに対し、男性は近群と中群に有意差は見られず、近・中群と遠群の間で有意差が見られた。

粗品場面においては、性別（男性、女性）×心理的距離（近、中、遠）の2要因分散分析を行った結果、性別の主効果があり($F(1,123)=6.689, p<.05$)、女性の羞恥感得点が男性の羞恥感得点よりも高かった。

【対人不安傾向の分析】

対人不安傾向が高いほど逆U字的な関係が強いことが予想される。そこで心理的距離ごとに対人不安傾向と羞恥感の相関を分析した。もし、逆U字の関係が対人不安傾向と関連するならば、心理的距離の中群において、対人不安傾向との相関が最も強いであろう。

相関係数を検討した結果、学食場面では、羞恥感と対人不安傾向との相関は心理的距離：近、中、遠の順に、 $r=.140, ns$; $r=.338, p<.01$; $r=.262, p<.01$ であり、心理的距離が中程度の場合に相関係数が最も高かった。

粗品場面においては、対人不安傾向と羞恥感との相関は、心理的距離：近、中、遠の順に、 $r=.270, p<.01$; $r=.430, p<.01$; $r=.406, p<.01$ であり、心理的距離が中程度の場合に最も相関が高かった。

考 察

学食場面においても日常生活場面での失態においても、羞恥感の程度は心理的距離が中程度—顔見知り程度—の人に見られる場面が最も強く、見知らぬ人に見られる場合が最も低いとの結果は、堤(1992)や佐々木・菅原・丹野(2005)の先行研究を支持するものであった。ただし、本研究では、親しい人に見られる場面が、見知らぬ人に見られる場面より羞恥心を強く感じる事が明らかにされ、現代の青年が親しい友人に対しても自己のイメージを壊さないように繊細に気を使い、相手の視線を強く意識している

ことが示唆された。心理的距離の近い親しい人に見られる場面での羞恥感の生起についてさらに明らかにするために、研究2において、観察者の量を増やすことにより、羞恥感の程度と心理的距離との関連を検討する。

また、学食場面は粗品場面と比較すると、心理的距離が近い人と、遠い人に見られる場合において羞恥感得点がより高く、全体的に学食場面でランチメイトがいないことは、日常場面で失態を演じるときと比べ、羞恥感—他者から拒否されることへの警告信号—がより強く、心理的な自己の存在基盤を揺るがす恐れ(菅原,1997)の強いことが示唆された。

また性差の分析より、女性が男性よりも羞恥感を強く感じたことが示され、近年の臨床報告を指示する方向を示した。

研究 2

目 的

研究1では、一般大学生が学生食堂での個食場面において感じる羞恥感の程度は、大勢の中の一人の観察者との心理的距離と逆U字関係を示すことが明らかにされた。さらに研究2においては、観察者を量的に増加させて全員に見られることとし、全員の視線を感じる場面を想定して、個食場面での羞恥感と心理的距離との関連を明らかにする。その際、研究1の学食場면을学食場面1とし、研究2の学食場면을学食場面2として比較分析する。

方 法

実験参加者 大学生70名(男性42名,女性28名;平均年齢19.04歳,SD=0.788)。

調査実施期間 2010年1月上旬

質問紙

研究2での教示文は以下の通りであった。教示文「2限目の授業が終わり、あなたは学食にご飯を食べに行くことにしました。一緒に食べる人も見つからず、次の授業もあるため、一人で行きました。学食で食べているまわりの人はみんな“_____”ばかりでした。その中であなたが一人で食べる時のことを思い浮かべて

下さい。」

“ ”には研究1と同様の心理的距離の異なる3つの観察者を割り振った。観察者の順序はランダムとした。

その他の質問項目、羞恥感の程度の測定、対人不安尺度は研究1と同様のものを用いた。

手続き

実験参加者には、記述をよく読み状況や観察者を具体的に想像してから所定の質問に答えるよう求めた。

結果

【羞恥感の分析】研究2（学食場面2）における各心理的距離での羞恥感の平均得点を、研究1（学食場面1）と合わせて Figure 2 に示した。各場面における羞恥感得点の平均値について場面（学食場面1、学食場面2）×心理的距離（近、中、遠）の2要因分散分析を行った。場面は個体間要因、心理的距離は個体内要因であった。その結果、場面の主効果($F(1,192) = 8.983, p < .005$)と場面×心理的距離の交互作用($F(2,384) = 3.036, p < .05$)がみられた。交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、羞恥感得点平均値は学食場面2が学食場面1より近群で有意に高く、遠群で有意に高い傾向があった。また羞恥感得点の平均値は、学食場面1では前述のように、心理的距離の中群が最も高く、逆U字的関係が見られ、中群と近群、中群と遠群、近群と遠群の間に有意差が見られた（近<中>遠、かつ近>遠）。しかし学食場面2では、羞恥

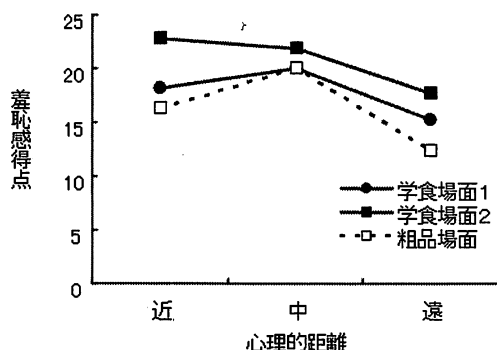


Fig.2 各心理的距離における羞恥感得点平均値

感得点の平均値は、近群と中群の間には有意差はなく、逆U字的関係は見られず、近群および中群は遠群よりも羞恥感得点の平均値が有意に高かった（近≒中>遠）。また場面別に性差について性（男性、女性）×心理的距離（近、中、遠）の2要因分散分析を行った結果、学食場面1については前述のように中群と遠群において女性が男性よりも羞恥感得点の平均値が有意に高かったが、学食場面2では性の主効果も交互作用もみられなかった。

【対人不安傾向との相関】

対人不安傾向と羞恥感得点との相関は、近群、中群、遠群の順に、学食場面2では $r=.464, p < .01$; $r=.416, p < .01$; $r=.262, p < .05$ で心理的距離の近群が最も相関が高かった。

考察

学食場面1において、羞恥感の程度は心理的距離が中程度—顔見知り程度—の人に見られる場合が最も強く、対人不安傾向の高さとも有意に相関し、見知らぬ人に見られる場合が最も低いとの結果は先行研究を支持した。ただし、親しい人に見られる場面が、見知らぬ人に見られる場面より羞恥感がより強くなることが示された。この傾向は周囲全員の視線を意識する学食場面2でさらに明らかになり、心理的距離が近い観察者たちとの場面も、心理的距離が中程度の観察者たちの場面と同様に、心理的距離が遠い観察者たちとの場面よりも羞恥感が強く、対人不安傾向との関連も有意に高かった。現代の青年たちが親しい友人に対しても、自己のイメージを壊さないように繊細に気を使い、相手の視線を強く意識し、恐れている一側面が示唆された。

総合的考察

本研究の目的は、これまで主に臨床心理学や精神医学の分野で報告されてきたランチメイト症候群について社会心理学的な側面から実証的に検討することであった。

研究1ではランチメイト症候群に順ずる場面としての「学食で個食を見られる場面」と先行

研究の日常での失態を演じた「粗品をもらうために並んでいるところを見られる」羞恥場面において、心理的距離の異なる3人の観察者を想定し、羞恥感と心理的距離の関連を検討した。学食場面・粗品場面ともに、逆U字的関係が見られ、先行研究と同様に、羞恥感の程度は心理的距離が中程度—顔見知り程度—の人に見られる場面が最も強く、対人不安の高さとも関連した。ただし、本研究では、心理的距離が中程度の人だけでなく、心理的距離が近い人と遠い人の間にも有意差が見られ、近い人に対しても強い羞恥感を抱くことが示された。先行研究では心理的距離が近い人と遠い人の間には差が見られなかったが、今の学生が従来の学生に比べ、親しい関係も友人に対しても、自己のイメージを壊さないように繊細に気を使い、相手の視線を強く意識していることが示唆された。

また研究2では観察者を“特定の一人”からさらに“周囲の人全員が均質な心理的距離の人”とし、同様の質問紙実験を行った。その結果、心理的距離の近い人も中程度の人と同様に、心理的距離の遠い人よりも強く羞恥感を生じさせ、対人不安傾向との関連も高いことが示された。研究1の結果と比較すると、羞恥感の程度は心理的距離:近と遠で研究1より有意に強くなり、観察者が多いほど羞恥感が強くなることが示された。研究2においては、教示文によって周囲の人たちの視線が自分のほうに向いていることを直接表わす内容を示していなかったにもかかわらず、この結果が得られたことは、学生がいかに周囲の人を意識し、自分の中に他者の視線を取り込んでいるかが伺える結果となった。したがって、羞恥感を感じやすいとされた“半知り”や“中間的關係”の人が周囲の人間関係の大半を占める学校や職場で感じる羞恥感是非常に大きくなり、親しい友人群の視線を意識し怖れている側面が示唆された。

引用文献

- 安藤清志 1994 セレクション社会心理学1『見せる自分/見せない自分—自己呈示の社会心理学—』サイエンス社。
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497—529. (佐々木ら, 2005 による)
- 樋口匡貴 2000 恥の構造に関する研究 社会心理学研究, 16(2), 103—113.
- 池上貴美子・中嶋美希 2011 学生食堂での個食における羞恥感に心理的距離が及ぼす影響 日本心理学会第75回大会発表論文集 119.
- 井上忠司 1977 「世間体」の構造—社会心理史への試み NHK ブックス 日本放送出版協会
- 笠原嘉 1977 『青年期—精神病理学から』中央公論社
- 香山リカ 2002 『若者の法則』 岩波新書
- Leary, M. R. 1983 *Understanding social anxiety: social, personality, and clinical perspectives*. California: Sage.
- (レアリー, M.R. 生和秀敏(監訳)1990 『対人不安』 北大路書房) (佐々木ら, 2005 による)
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. 1990 Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, 107, 34—47. (菅原, 1998 による)
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. 1995 *Social anxiety*. New York: Guilford Press. (菅原, 1998 による)
- 町沢静夫 2002 『学校, 生徒, 教師のための心の健康ひろば』 駿河台出版社
- Miller, R. S. 1995 On the nature of *embarrassability*: Shyness, social evaluation and social skills. *Journal of personality*, 63, 315—339. (菅原, 1998 による).
- 諸富祥彦 2001 『孤独であるためのレッスン』日本放送出版協会
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)—self differential の作成— 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59—83.
- 大嶽さと子 2005 「ひとりぼっち回避規範」が中学生の対人関係に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 52, 230-241.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 2001 対人不安におけ

- る自己呈示欲求について—賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から—性格心理学研究, 9, 142—143.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 2005 羞恥感と心理的距離との逆 U 字関係の成因に関する研究—対人不安の自己呈示モデル 心理学研究 76(5), 445—452.
- 佐藤静香・畑山みさ子 2002 女子大生の昼食時間への不安に関する研究調査—ランチメイト症候群検証の試み— 宮城女学院女子大学 発達科学研究, 2, 81—87.
- Schlenker, B.R., & Leary, M.R. 1982 Social anxiety and self—presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641—669. (佐々木ら, 2005 による).
- 菅原健介 1997 シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究. 7(1), 22—32.
- 菅原健介 1998 セレクション社会心理学 19 『人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学—』サイエンス社.
- 辻大介 2006 つながりの不安と携帯メール 関西大学社会学部紀要, 37(2), 43—52.
- 辻大介 2009 友だちがいないと見られることへの不安 月間少年育成, 54(1), 26—31.
- 角尾美奈 2009 集合同一性から見た対人不安の機制 永田良昭・飛田操編『現代社会を社会心理学で読む』ナカニシヤ出版 Pp17—31.
- 堤雅雄 1992 想像的他者との心理的距離の関数としての羞恥感 島根大学教育学部紀要(人文・社会科学), 26, 87—92.
- 内沼幸雄 1977 『対人恐怖の人間学—恥・罪・善悪の彼岸』弘文堂
- 山際勇一郎・堀祥道 1991 他者との心理的距離と評価懸念の関係 教育相談研究, 29, 13—17.
- 謝辞 本研究に暖かい御協力とご指導をいただきました金沢大学・理工学域の大岸通孝教授と人間社会学域の萱原道春教授に深く感謝いたします。